

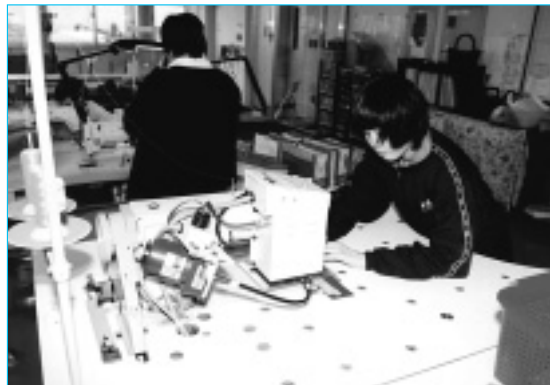
編集委員が 行く

これからの地域に根ざした就労支援

—沖縄の障害者就業・生活支援センター—

本誌編集委員 大妻女子大学人間関係学部教授

小川 浩



はつめい

障害者自立支援法において福祉施設から就労への移行がうたわれ、また、障害者雇用促進法の改正で精神障害者保健福祉手帳の雇用率算定が始まるなど、障害のある人の就労については、これまでになく制度上の追い風が吹いている。この追い風をどのように受け止め、障害のある人の就労を実現させていくか、就労支援の力量が問われている。これから雇用就労にチャレンジしてくる人々の中には、これまで以上に福祉施設や医療機関等を利用してきた知的障害のある人、精神障害のある人が含まれてくるであろう。働く力はあっても、それを職場で発揮するためには、丁寧な支援を必要とする人々である。就労につながるための支援はもとより、就労を維持するための支援に、より大きな労力が必要とされる。身近な地域において、伴走者のように、長期にわたって就労を支えていく仕組みが必要とされている。

現行の国の制度の中で、地域に根差して障害のある人の就労を支える機関として、今後も拡充が予定されているのが障害者就業・生活支援センターである。平成一八年度予算では、新規二〇カ所を含めて全国に一一〇カ所の設置が予定されている。就労支援事業を独自に構築でき

北部地区障害者就業・生活支援センター 「ティーダ&チムチム」

〒905-0006 沖縄県名護市字茂佐943
TEL 0980-54-8181 FAX 0980-54-3287



崎濱秀政所長

一部の大都市を除けば、障害者就業・生活支援センターがどのような機能するかが、その地域の就労支援の成否を握るといっても過言ではない。

数多く障害者就業・生活支援センターがある中で、沖縄県は、県域を三つの地域に分けて、三つの障害者就業・生活支援センターがそれぞれの地域で成果を上げている。授産施設等を運営してきた社会福祉法人が、障害者就業・生活支援センターをどのように地域で運営していくべきか、そのモデルとして、北部地区障



害者就業・生活支援センターと中部地区障害者就業・生活支援センターの二カ所を訪問させていただいた。

1、北部地区障害者就業・生活支援センター (ティーダ&チムチム)

(1) 沖縄の就労支援の先駆けとして

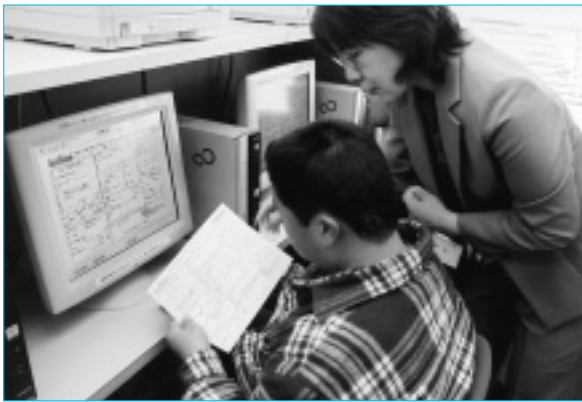
最近、米軍普天間基地のキャンブ・シユワブ沿岸への移転問題でしばしばマスコミに取り上げられている名護市は、那覇から高速道路で約一時間北上した沖縄本島の中心、沖縄の言葉で言う「ヤンバル」地域に位置する。名護市の人口は約五万七〇〇〇人。コバルトブルーの海と亜熱帯樹林に囲まれた美しい土地だ。素晴らしい自然と年間平均気温二一・六度という温暖な気候に恵まれているためか、名護でお会いする人たちは皆さん明るく穏やかで、人に優しい気がする。

今回訪問した北部地区障害者就業・生活支援センターは、愛称をティーダ&チムチムと言う。ティーダは沖縄の言葉で太陽を意味するのだそうだ。ティーダ&チムチムの運営母体は、沖縄北部で知的障害者更生施設や授産施設を運営する社会福祉法人名護学院。名護市街にあるティーダ&チムチムの事務所で、社会福祉法人名護学院理事長であり、ティーダ&チムチム所長の崎濱秀政さんからお話をうかがった。

崎濱さんの就労支援に対する思い入れは、昭和六三年に「働きたい」と願う一人の利用者を就職につなげた経験がルーツになっているそうだ。そのことが、他の利用者の「私も働きたい」という意識



訓練様子取材する筆者（写真右）



ハローワークで希望する就労先を探す

を喚起することにつながり、グループホームの設置、それに伴う日中の働く場の確保など、施設から地域への移行を実現するための仕事を一歩ずつ進めていくことになる。

現在、崎濱さんは理事長という要職に就いているが、現場経験に根ざした方針は、机上の理想論ではなく極めて実践的、現実的な進み方をしてきた。特に先見の明があったのは、就労支援を一部職員の努力によるものでなく、事業として明確に位置づけ、いち早く制度の導入を進めたことだ。草の根的な実践のままであったら息切れしているかもしれないが、平成一三年四月に人口約一二万人の北部地域を管轄する障害者就業・生活支援センター事業を立ち上げたことにより、就労支援の基地としての基盤を整え、社会的役割を担っていくことになる。

情報が豊富ではない沖縄にあって、県



就労支援ワーカーの中村淳子次長

職員と共に勉強しながら制度導入を進めていったエピソードからは、先駆者としてのさまざまな苦労がうかがわれた。しかし、その時のひらめきと実行力があつたからこそ、就労支援が元氣な沖縄の今日があるのである。

(2) 委託訓練のついで

先見の明は、障害者就業・生活支援センターにとどまらない。現在の第一号職場適応援助者である協力機関型ジョブコーチを二名配置し、さらに委託訓練事業を受託することによって、「就労相談」、「アセスメント」および「準備訓練」、「職場での集中支援」等、就労支援プロセス全体をカバーする体制を整えた。現在は、理事長職で多忙な崎濱さんをサポートして就労支援ワーカーの中村淳子さんが、これらの就労支援事業全体を取り仕切っている。

ティード&チムチムが実施している委託訓練は現在定員五人。この日は、ジョブコーチの赤嶺幸さんが引率して名護ハローワークへ行くというので、急遽、同行することとなった。ハローワークに着くと、とても自然な流れで、ハローワーク職員の説明を受けて各自がパソコンで求人を検索。まだ就職への意識があまりない人は、いろいろな求人票に目を通して現実を学んでいた。就職への



ハローワーク名護を訪ねる訓練生たち

意欲と希望がまとまっている人は、気に入った求人があると窓口に行つて具体的な相談を行っていた。

引率の赤嶺幸さんの動きはいかにもジョブコーチ的だ。出しゃばり過ぎず、障害のある人とハローワークの職員との橋渡しを上手に行っている。委託訓練の一場面であるが、あまり枠をはめることなく、一人ひとりに応じた課題設定と支援が行われているのが素晴らしい。ハローワークの職員の丁寧な対応にも感心させられた。

ティード&チムチムの委託訓練は、知識・技術習得コース+実践コースで、一カ月以上の職場実習が行われる。「基本カリキュラムを基礎にして、就労する前に相談者と向き合う時間として委託訓練を活用したい」、「障害があるためにできないことと、経験がないためにできない

琉球協同飼料株式会社 「やんばるミートプラザ」

〒905-0022 沖縄県名護市世富慶 755
TEL 0980-53-7053 FAX 0980-53-7043

高城栄友所長



も試してみたが、ジョブコーナーが付いて適性を検討した結果、ダンボール箱組み立てを専門に行うことになったという。高城所長や津波さんの支援を担当したジョブコーナーの赤嶺智さんから案内していただき、豚が大きなカギに丸ごと多数ぶら下がっている光景に多



ダンボール箱を組み立てる
津波夏樹さん（一日約千個）



ことの見極めが大切」、「委託訓練では広く体験を重ねることと体験を振り返ることを大切にしている」と中村さんは言う。

(3) ジョブコーナー支援の成果

次に、ジョブコーナー支援によって自閉症の津波夏樹さんが就労している琉球協同飼料株式会社・やんばるミートプラザを訪問した。やんばるミートプラザの高城所長は、津波さんの仕事ぶりを「まったく障害を感じさせない」、「障害のない人でもあれだけのスピードを維持することはできない」と高く評価する。

やんばるミートプラザは、豚を解体して精肉カットをしている工場で、津波さんはカットされた精肉を出荷するための

段ボール箱の組み立てを行っている。初めは他の仕事も試してみたが、ジョブコーナーが付いて適性を

少驚きつつ、工場内を奥へと進んだ。

工場の一歩奥で、壁に向かって、驚くほどのスピードで段ボール箱の組み立てをしているのが津波さんだ。ダンボールを決められた順番に組み、ガムテープを決まった場所に、決まった長さで張るという単純作業である。しかし、箱の種類によって組む順番やテープの張り方は微妙に違うため、見た目ほど簡単ではない。なにより驚いたのが、そのスピードである。体全体でリズムを取りながら、あつという間に自分の身長ほどに箱を積み上げていく。津波さんが仕事を休んだ日に、他の従業員がダンボール箱組み立てを担当したら、ラインのスピードに箱の組み立てが追いつかずに困ったという。

津波さんの様子を注意深く見ていると、自閉症の特徴は顕著で、こだわりも強そうだ。支援の様子を詳しく聞いてみ



琉球協同飼料株式会社「やんばるミートプラザ」

ると、絵カードや目印等の視覚的手がかりを活用して、ジョブコーナーの赤嶺智さんが丁寧な指導を繰り返したという。初期の指導を担当した従業員の方が、津波さんの仕事ぶりをうれしそうに、そして誇らしげに見ている様子から、ナチュラルサポートも万全であることがうかがえた。「こう支援すれば働けます」。自閉症のある人の就労支援のモデルと言えるような職場である。

(4) 障害者就業・生活支援センターの実績

ティード&チームチームでは、平成一三年度の開設以来、年々登録者を増やし、現在では二四五人の登録者を抱えている。内訳は、精神障害者九六人、身体障害者六九人、知的障害者八〇人で、三障害者がバランス良く含まれている。そして開設

中部地区障害者就業・生活支援センター

〒904-0033 沖縄県沖縄市山里2-1-1
TEL&FAX 098-931-1716



宮国龍男所長

2、中部地区障害者就業・生活支援センター

(1) 普通の授産施設から 障害者就業・生活支援センターへ

沖縄での二日目は、沖縄本島中部の沖縄市にある中部地区障害者就業・生活支援センターを訪問した。沖縄市はかつてのコザ市と美里村が合併した市であり、嘉手納空軍基地がある基地の町

以来、一々一件の職場実習を実施し、六人を雇用就労につなげたという。事業所が多くはない沖縄北部地域において、十分に胸を張れる事業実績である。実績が順調である理由について中村さんによると、「職員だけが頑張っているのではなく、ハローワークはもとより、学校、医療機関、民生委員、企業の人たち、さまざまな地域の人たちの力があるからですよ」と言う。肩の力を抜いたスタンスで、やわらかい沖縄言葉で言われると、「ネットワーク」という片仮名の意味がすごく人間味あふれた響きがしてくるから不思議だ。

である。

中部地区障害者就業・生活支援センターは、知的障害者通所授産施設「希織」および「希織分場（ちゅいたれ）」を運営する社会福祉法人新栄会が受託している。希織と希織分場は合わせて定員三九人。木工や手芸などの非常に質の高い自主製品の製作や、受注作業を行っている。自然の木の材質を生かした椅子、丁寧な縫製の手芸小物などは、非常に商品価値が高い。アンティーク調の椅子が気に入ったので購入できるかうかがったら、希望者が多いのでかなり待たなければ手に入らないとのことであった。

希織で我々を迎えて下さったのは所長の宮国龍男さん。中部地区障害者就業・生活支援センターは、この方を抜きにして語ることはできない。筆者と宮国さんとの出会いは五年以上にさかのぼる。ある年の仲町台センターのジョブコーチ・セミナーで、若い年齢層が多い参加者の中、失礼ながら、やや年齢の高い参加者として目立っていたのが宮国さんであった。

縫製作業、バックづくりに挑戦中



後から聞けば、民間企業に長年勤めていた宮国さんが、あるきっかけから授産施設の仕事に関わり始めたところ、運営方針にうたわれている「就労への移行」がほとんど行われていないことを不思議に思った。そこで、いくつかの研修に出てみたところ、就労への移行を本気で実現するものとしてジョブコーチ・セミナーに出会ったのだという。ティード&チムチムの崎濱さんと同じく、「考える」だけでなく、「実際に変えてしまう」のが普通の人とは違うところである。施設に戻ってから、利用者と保護者を対象に就労希望に関するアンケート調査を行い、数少ない就労希望者を試行錯誤の支援の結果、就労につなげたという。

その後、平成一四年度より協力機関型ジョブコーチを配置して就労支援の実績を重ね、平成一六年度より障害者就業・生活支援センターを受託した。平成一六年度には、初年度ながら就職者二三人を出すという順調なスタートをきっている。ティード&チムチムと同様に委託訓練に取り組んでいるほか、第一号職場適応援助者、養護学校在校生にジョブコーチの支援を行うジョブサポーター制度（沖縄県単独事業から民間助成の研究事



知的障害者通所授産施設「希織」

〒904-0034 沖縄県沖縄市市内1-11-15
TEL 098-933-8810 FAX 098-933-8828



編集委員の素顔 小川 浩

編集委員として原稿を書かせていただくのは、今回の沖縄が最後となりました。さまざまな実践の場を訪問し、原稿にまとめる作業を通して、私自身も勉強になり、また次の仕事への元気をいただくことができました。これまで取材にご協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。また、稚拙な文章を読んでいただいた読者の皆様、ありがとうございました。

業となる）など、使える制度はすべて使って「前進あるのみ」という状況である。

(2) 企業の支援と人の支援

中部地区障害者就業・生活支援センターが、短期間に授産施設から地域の就労支援機関へと脱皮できた要因の一つとして、就労支援の事業展開をリードした宮国さんが、企業の文化・センスの持ち主であったことが挙げられる。就労支援に福祉の専門性が必要であることはいまでもないが、それに加えて、企業を理解できるかどうか、企業を支援できるかどうか、さらには労働関係機関と連携できるかどうか、就労支援機関としての成果に大きく影響する。

宮国さんの下、現在、障害者就業・生活支援センターの実務を担う石川哲次さんは、営業マンの職歴がある。職場開拓で企業を訪問することが苦にならないと



言う。企業と関係を作るちよつとしたツボを心得ているのだろう。福祉畑だけを歩んできた人とは、どこか違う雰囲気を感じられるところが面白い。

その石川さんが、「ちよつと待っていて下さい、見せたいものがあるんです」と箱に入った大きなデコレーションケーキを持ってきた。自分の誕生日に、利用者さんが趣味を生かして作ってくれたのだと言う。そのうれしそうな顔。企業を支援する顔と、障害のある人を支援する顔。就労支援には二つの顔をバランス良く持っていることが必要なのだと改めて感じた。

おわりに

就労支援のニーズが広がり、地域に根ざした就労支援の発展が期待される今日、障害者就業・生活支援センターが担う役割は大きい。一〇〇カ所を超えようとしている障害者就業・生活支援センターは、それぞれに個性豊かであってよいが、もしも評価が許されるとしたら、次の二つのポイントが大切であると思う。

第一は、「運営母体の法人のためだけでなく、地域のためという方針が明確かどうか」。



木の材質を生かした椅子などをつくる

第二は、「障害のある人の支援と企業の支援の双方をできるかどうか」である。

今回取材させていただいた北部地区障害者就業・生活支援センター、そして中部地区障害者就業・生活支援センターは、個性は異なるものの、右記の二つの点で非常に優れており、福祉施設を母体として発展する障害者就業・生活支援センターのモデルであるといえる。授産施設等に付置することで、このように質の高い障害者就業・生活支援センターが増えていくのであれば、障害者自立支援法が目指す就労移行は成果が上がることだろう。

また、今回、改めて感じたことは、「人」の大切さである。北部、中部ともに、強い就労支援のスピリットを持って、組織をリードしてきた崎濱さん、宮国さんの存在は大きい。制度も大切であるが、制度を活用して、組織を運営する人材をどうするか。地域の就労支援の仕組み作りには、一定の時間がかかることを覚悟して、じっくり取り組んでいくことが必要である。